

巻頭随想

創刊70周年からの出発

武田 弘之

コスモス創刊号を読む

コスモス創刊70周年である。私は創刊当時から会員ではないから、コスモスの初心に学ぶべく、創刊号を手にとつてじっくりと読んでみた。

コスモス創刊は昭和28年3月1日。A5判48ページの小冊子ながら、読むほどに心に響き、喜びと親しみを覚える。表紙に「宮柊二編集」とある。「編集」であつて「主宰」ではない。柊二は生涯「主宰」を名告らなかつた。編集責任者であることの姿勢と信念を貫き通したのである。表紙を開くと「みづからの生の証明を」（以下、漢字は旧字体が使われているがここでは新字体で示す）と題する短文がある。創刊に際して柊二が書いたもので、その冒頭に「われわれは作品によつてみづからの生を証明したいと思ひます。」とある。こうして「生の証明」はコスモス短歌会における不動の作歌理念となつた。

誌名「コスモス」は野村清の発案によるという。野村は

「多磨」時代の同志として柊二と歩みを共にしてきた仲間であり、年配者としてコスモス創刊の発起人グループの中心的な役割を果たした人である。

誌名「コスモス」は何を意味するのだろうか。「秋桜」とも呼ばれる植物を示すのか、どうか。「みづからの生の証明を」の中で柊二は「誌名『コスモス』を、いかやうの意味にうけとつていただいても結構です。」と書いている。私は植物名と共に「宇宙」の意味をこめた命名ではないかと思う。創刊号には釈道空と山本健吉の特別寄稿が掲載されているが、道空の文のタイトルは「宇宙の花」であり、その末尾は『「こすもす」の祖人白秋の大才にして、なほ至らなかつた所は『こすもす』の児孫が努めて贖^{アガナ}はねばならぬ。その為にも、この雑誌の出現に希望を寄せる私である。』と書かれている。道空はこの年の9月3日に逝去した。天才道空が自らの終焉を近くに控えて書いた文章のタイトルが「宇宙の花」であることの意味は重いと思われる。因みに日本国語大辞典で「コスモス」の項を見ると、「ギリシア神話で、秩序整然とした調和ある世界。宇宙。」とある。創刊後のコスモスに

「宇宙花」と題する会員の合同歌集が何冊もあり、コスモス誌上に「宇宙の花」という選歌欄のシリーズが設けられているのも故のあることだろう。

コスモス創刊号に作品を寄せた人の数は302名である。作品欄は作者名の五十音順に作品が掲載されている。五十音順だから宮柘二作品は終りのほうに4首見える。その中では、後に歌集『日本挽歌』の掉尾を飾った「蠟燭の長き炎のかがやきて揺れたるとき若き代過ぎぬ」が目を引く。滝口姓で発表されている英子夫人の歌「ガスこんろの清く噴く炎が眼裏を移りつつ消えず眠りゆくとき」も見える。その他、なつかしい名前が数々並ぶ中で、今年2月号までコスモスに健詠を見せた古屋祥子の三首（当時19歳）もあってほほえましい。

特選作品欄もあり、その中では田谷鋭の「生活に面伏す如く日々経つつセルジュリアールの踊りも過ぎむ」や、安立スハルの「雨に濡れし褐色の犬のあとを行けりこのごろ寂かなる一日だにあらず」がひとときわ精彩を放っている。

美の香り立つ歌誌

コスモスが世に出ると、「まるで芸術誌のようだ」という評判が広まったという。目次のページの前に裏表で西欧の絵画とその解説が創刊号から11月号まで、更に昭和29年・30年の毎月続いて、ピカソ、ムーア、ルオー、ジャコメッティ、ミロ、マティスなどの作品と人物が次々に紹介された。毎月、簡潔明快な解説を書いた滝口修造は英子夫人の縁戚の画伯で

ある。たまたま創刊号に採り上げられたブラックの「素描」は一九三二年に描かれたもので、私の生年と同じであり、この偶然の一致に私はひとり驚喜した（閑話休題）。

創刊号に寄稿された山本健吉の「詞華集への要望」はシリーズ「美について」の第1回であり、翌月号から高岡徳太郎、戸板康二、笹村草家人、安西冬衛、今井兼次、与田準一、柿内木然、木下順二、江口隆哉、駒井哲郎といった錚々たる筆者を迎えて昭和29年2月号まで毎号続いた。

美についての深い関心と配慮はコスモスの紙面作りにも現れた。活字の大小や組み方の変化が工夫され、適宜にカットが配置されて、誌面のレイアウトにも細かい工夫が施されている。コスモスは最初から実作第一主義を掲げてきびしい選歌を徹底させたが、雑誌作りの上に細やかな美の配慮を忘れなかった。それは柘二の資質によるところが大きかったと思われる。森鷗外の小説「天籠」の画家M君は柘二の叔父宮芳平であった。叔父の影響を受けて、若い柘二は「画家になりたい」と思ったという。コスモスの昭和42年4月号から44年3月号まで芳平の「絵と文・聖地巡礼」が連載されたが、それは柘二の心の内を垣間見せるような内容であった。

コスモスの絵といえば、表紙絵に駒井哲郎画伯の銅版画が連載されたことも忘れたい。昭和35年1月号から52年12月号まで、全55種類の名作で、コスモスの表紙を飾るために制作された垂涎の逸品揃いである。このうち私の所蔵しているのは、昭和49年のコスモス賞の賞品として頂戴した、「月のたまもの」（昭和27年制作、限定10部）であり、過日、東京

上野の博物館で行われた「駒井哲郎作品展」に乞われて出品した。

奇跡の人に会う

私が宮柁二に初めて出会ったのは昭和29年12月であった。その年の3月に大学を卒業して、学習研究社（通称「学研」という小出版社に就職し、学習雑誌の編集に携わったが、翌30年4月に高校生用の月刊誌を創刊することになり、短歌投稿欄の選者を担当していただくべく、当時、東京都杉並区高井戸にあった日鉄富士製鋼所の社宅である柁二宅へ連日通ったが、当時、諸雑誌の選歌を担当し、コスモス創刊後の大忙しにあつた柁二には承諾してもらえなかつた。そのいきさつは私の歌集『聲また時』のあとがきにも書いたので省略するが、やっと「わかつた。引き受けたよ」と言ってもらえたのは翌年の1月2日であつた。以来、昭和58年3月号まで毎月1回の休みもなく27年余りの長きにわたつて選歌稿をいただくことができた。かつてこのような歌人が日本にいたのだろうか。宮柁二は奇跡の人であり、1月2日は私にとって奇跡の日である。

昭和34年3月、私はコスモス短歌会に入会した。ペンネームは葉山郁。なぜこのペンネームを使ったかは秘であり、もちろん、柁二の初恋の人が郁子さんであることは知らなかつた。後にコスモス創刊30周年記念「宮柁二アルバム」（昭和58年8月23日発行）を提案し、宮夫人、山本清、今村寛、白

鳥芳郎らと協力して作つたが、今まで実像が明かされていなかった「I子さん」（柁二の初恋の人）の写真が見つかったので、私は柁二に直訴してぜひ古田鳥郁子さんの写真を入れたいと申し上げて了解していただいた。後に、郷里を同じくする新潟の中山礼治から、「神話のように伝えられている宮さんの初恋を、今さらあばかなくても」と批判されたが、私は聞き流した。

因みに中山は柁二と同年生れ、剣道に堪能な軍人でもあつて、戦地へ行く柁二の背囊に文庫本「万葉集」を潜ませたといわれる。気骨のある人であつたが、コスモス昭和54年12月号に『聲また時』論を書いてくださり、コスモス第2回評論賞を受賞している。

過日、柏崎驍二から恃まれて東北のコスモス大会に出席したことがある。特別希望で中山礼治が参加し、昼間に皆が作った歌の選をするため、私は中山と一部屋で夜をがんばつたが、その時、中山は大きな天眼鏡で詠草の文字を追つていた。その真剣な姿が今も心に焼きついている。

ここで、生前の宮柁二という人柄を知ってもらうために、私蔵する柁二直筆のがきを2通紹介させていただく。

1枚目は、昭和36年元日に頂いた賀状の文面である。「期待しています。私も勉強しますから、道連れになつて下さい。」というもの。若輩の新会員に向かつて「道連れになつて下さい。」には驚いた。柁二は大会などで「先生、先生」と言つて近寄る会員を快く思わなかつた。時には「その先生

の歌を10首ここで讀じてごらん」ときびしい言葉が出たりした。

2枚目は、学研の仕事で、有識者の方々に求めたアンケートへの回答はがきで、次の二つの質問に回答していただいたもの。昭和42年12月13日と郵便局の消印にある。

一、私の好きな人生訓——現代高校生に与えたいき——
二、いつ、どのようなきっかけでこの人生訓が強く印象づけられましたか。その時のエピソードを簡潔に。
それに対する柘二の回答は、

一、今日は今日だ。

二、二十数年前、私は兵隊で大陸にいました。或る朝、わきの戦友がこう言っていたのです。一人ごとのように。

今日まで生きていたことが不思議で、明日のことは判らない。今日を全力で生きるより仕方がない。今日だけが対象で確かな、ということでしょうか。

というものであった。

先年、私はコスモス選者・編集部員の80歳定年を提案して受け入れられ、その後その時期になって双方とも退いた。提案の理由は、若い実力者が多く出てきているので、活躍してもらいたいと思ったからである。

コスモス創刊60周年第一記念号に、宮英子氏が次のように書いてくださっている。「編集部が」大森にあった頃から編集の中核にあつて取りしきって下さったが、特にこの十余年の編集長として実質的に編集部を牽引して下さった。編集会

当日は誰よりも早く出席された。」と。恐縮である。私はコスモスの編集や校正が好きで、編集部へ行くのが楽しかっただけなのに。

そして、五年後の創刊65周年記念号では、平成29年9月12日のコスモス全国大会を締め括つて高野公彦は言う。「コスモスの歌風を要約するのは困難ですが（中略）、単なる写生、単なる描写を目的とする集団ではありません。人間の心をどう表現するか、また現実を、社会をどうとらえるか。そういったことを考えるだけでも、まだまだ今後無限に多様な歌が生れてくると思います」と。

また、同号のシンポジウム「コスモスの継承と発展」の司会を担当した小島ゆかりは、野村清歌集『しゃっぽ』の歌、「サントリーのCMなれどこの一句わが意を得たりOPEW New」を引用して次のように言う。「オールド」ということは、多くの体験があつて、人生の時間を豊かに重ねてきたからこそむしろ「ニュー」なんじゃないかと思ひます。若い力も大切ですが、老も若も力を合わせてコスモスをやっていきたいなと思ひます」と。

野村清と言へば、創刊号の「コスモス便」に野村が書いた、「コスモスは新人を簇出させるであらう」という一文が思われる。野村の予言は的中し、コスモスは柘二在世中に、質量とも日本一の短歌会になった。

そして今回、コスモスの舵取りは高野公彦から小島ゆかりへ手渡される。

創刊70周年からの出発が始まった。